

1st Annual Meeting

第1回日本放射線看護学会学術集会を振り返って

Looking back on
“The 1st Annual Meeting of the Radiological Nursing Society of Japan”

西沢 義子

弘前大学大学院保健学研究科

Yoshiko NISHIZAWA
Hirosaki University Graduate School of Health Sciences

平成24年3月18日に長崎大学、鹿児島大学と弘前大学による第1回三大学合同会議において、放射線看護の高度化・専門化を目指すためには学会設立が必要であることが確認された。この席上、平成24年度中の学会設立と学術集会開催を決定し、第1回学術集会は当番校として弘前大学が指名され、この記念すべき第1回学術集会会長を私が務めることになり、大変光栄に思っている。当初は東京都での開催も検討したが、開催まで非常に短期間での準備であることから、平成24年9月29日に地元弘前市で開催することにした。

学会の立ち上げが決定してから学術集会開催まで6ヶ月という厳しい条件下であったが、野戸結花事務局長を中心に精力的に準備が進められ、第1回学術集会を成功させるために企画委員が一丸となって取り組んだ。まずは第1回学術集会のPRとして医学書院「看護研究」(平成24年7月末発行)に掲載することができ、全国に向けて情報提供することができた。また7月上旬には学会HPと同時に第1回学術集会HPも立ち上がり、広く広報活動を行った。

今回の学術集会では、学会設立記念講演として小西恵美子理事長による「放射線看護の高度化・専門化を目指して：基本は放射線防護と倫理」を企画し、小西理事長には日本の放射線看護の始まりやこれまでの放射線災害の経験から新しい放射線看護の枠組みについてご講演いただいた。参加者からは非常に興味深い内容であり、もっと時間をかけて詳細に聞きたいとのご意見もいただいた。シンポジウムは「放射線看護専門看護師の必要性和期待される役割」をテーマにした。学会設立の発端が放射線看護専門看護師の誕生を実現するための学術的基盤づくりであった。そこで長崎大学大学院医歯薬学総合研究科浦田秀子教授からは大学院教育の現状とその成果について、弘前大学大学院保健学研究科齋藤陽子教授からは画像診断業務に携わっている医師の立場から、福島第一原子力発電所の事故による経験を基にした現場の立場からは福島県立医科大学附属病院中嶋由美子副院長兼看護部長からご発表いただいた。多くの参加者からは分かりやすかったとのご意見をいただいたが、時間の関係から十分なディスカッションはできなかつたことが残念である。「放射線看護専門看護師の必要性和期待される役割」についてはさらなる議論が必要である。

一般演題募集は約1ヶ月というこれも短期間での募集であり、演題申し込みがあるかどうか不安は大きかった。しかし、放射線看護の学会を待ち望んでいたかのように全国各地から14題の申し込みがあった。当初は口演のみとしていたが、余裕のない会場を急遽見直し、ポスター会場を設定し、6題のポスター展示が行われ

た。参加者の熱心さが伝わるかのように会場内は熱気に溢れた意見交換が行われた。口演は2群計8題の発表があり、活発な意見交換が行われ、まさしく放射線看護の高度化・専門化に向けたスタートとなった。参加者は北海道から九州まで全国各地からの約250名であった。この時期は他の学会の学術集也会も開催されていたが、このように多数の参加者があったのは日本放射線看護学会に対する期待が大きかったものと思われる。今後はこの期待に応えるために学術的基盤を構築するための一層の努力が必要である。懇親会は本研究科の第4回緊急被ばく医療国際シンポジウム(The 4th International Symposium on Radiation Emergency Medicine in Hirosaki University:平成24年9月30日開催)ウェルカムレセプションとの合同開催であった。

その効果もあり、参加者は110名であった。狭い会場ではあったが、国際シンポジウムのシンポジストや放射線に関する研究者との交流ができ、まさしく国際化に向けてのスタートでもあった。この交流を通して今後の学術的基盤を構築する上でのネットワークができたことを確信した。

本学術集会の模様は翌日には全国紙の朝日新聞、地方紙の東奥日報、陸奥新報で紹介された。また、文教ニュース(10月22日)、文教速報(10月24日)で紹介された。さらに、週刊医学界新聞第3003号(平成24年11月19日)にも「日本放射線看護学会が設立される」という見出しのもとに、第1回学術集会の様子が全国に向けて紹介された。

日本放射線看護学会は動き始めたばかりであり、第1回学術集会への経済的支援には余裕はなかった。そこで、この学術集会を保健学研究科との共催とし、弘前大学創立50周年記念会館を無料で借用することができた。また、資金面では弘前大学大学院保健学研究科對馬均研究科長の寛大なご高配と事務方の懇切丁寧なご助言により、本研究科「緊急被ばく医療人材育成プロジェクト」から支援を得ながら進めることができた。これまでのご支援に対して感謝申し上げたい。また、一般演題に関しては短期間の査読にご協力いただきました方々、広告、寄付等にご賛同いただいた企業の皆様には感謝申し上げます。

